

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか — アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

柴垣 優子[†]

Do Elementary Japanese Textbooks Influence Japanese Language? — A Survey Comparing General Native Speakers and Instructors —

Yuko Shibagaki

1. 研究の動機

日本語教師である筆者が日本語教育の勉強を始めて間もない頃は、日本語教科書の文法項目や例文の中に違和感を覚えるものがあった。しかし、日本語教師の経験が長くなるにつれ、そうした違和感は薄れていった。当初日本語教科書の例文に対して抱いていた違和感が薄れていったということは、日本語母語話者としての言語感覚が変化したということであろうか。だとすれば、筆者は学習者に対して、日本語母語話者が使わない日本語を教えている可能性はないだろうか。もちろん、教科書でどのように教えていたとしても、日本語母語話者としての適切な言語感覚を持ち続けているという日本語教師も多いであろう。しかし、自分は実生活では使わない言葉であっても、学習者が教科書通りに話していたら、それは許容するのではないだろうか。また、学習者の日本語の習得度を考慮して、学習者に理解のできる範囲での日本語を使用することを常とするあまり、より適切な日本語を導入するまでの“代用”と考えられる日本語を、修正しないまま使い続けているということはないだろうか。“職業病”とは、「ふだんから出てしまう職業上のくせや習慣」のことであるが、日本語教師もその例外ではないのではないかと筆者は考える。本研究では、そうした筆者自身の疑問から、日本語教科書の例文に対する反応に、日本語教師と一般日本語母語話者との間に差異があるのか、日本語教師は日本語教科書に影響されている可能性はあるのかを明らかにしたい。

2. 研究方法

国内シェアトップの初級日本語教科書を分析し、初級文法項目に対する先行研究および日本語母語話者としての筆者の言語直観により、適切ではないと思われる初級文法項目を抽出した。筆者が不適当だと感じた初級文法項目につ

いて「意味変化」「書き言葉」「文法重視」「無文脈」「代用」の5つの観点から考察した。

さらに筆者が不適当だと感じた初級文法項目に基づいてアンケート調査を実施し、アンケート結果に日本語教師と一般日本語母語話者の差異があるか、日本語教師は日本語教科書の影響を受けているかどうかを考察した。

2.1 初級日本語教科書の国内シェア率

本研究の調査対象である初級日本語教科書について、エスアイケイアイ出版部（2020）の国内日本語学校アンケート調査より、各日本語学校で使用されている初級教科書をカウントしてシェア率を算出した。アンケートに回答のあった国内日本語学校491校から、初級教科書の項目に無回答だった39校を除いた、452校を全体の数とした。一番使用している学校が多かったのは『みんなの日本語』（以下『みんな日』）319校（使用率70%）、2番目に多かったのが『できる日本語』45校（使用率10%）、3番目に多かったのが『大地』16校（使用率3%）であった。また、エスアイケイアイ出版部（2020）のアンケート調査によるシェア率上位3冊について、エスアイケイアイ出版部（2015）及びエスアイケイアイ出版部（2018）のアンケート調査より、各日本語学校で使用されている数をカウントして各年度の全体に占めるシェア率を算出した。初級教科書の項目に回答のあった日本語学校の総数が、2015年436校、2018年456校、2020年では452校であった。総数が一定ではないため、各年度の全体に占めるシェア率の変化を比較した（表1）。

2.2 初級文法項目に対する先行研究

初級文法項目に関して、野田（2005）は、50年前の初級教科書で取り上げられている文法項目が、現在の多くの初級教科書と大きな違いはないことを問題視し、庵（2015）は、既存のシラバスの実質的な改定を拒んできたこれまで

[†]2022年度修了（人文学プログラム）

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

表1 初級日本語教科書国内シェア率の推移

教科書名	シェア率			出版年	出版社
	2015年	2018年	2020年		
みんなの日本語	76%	74%	70%	1998年	スリーエネットワーク
できる日本語	2%	7%	10%	2011年	アルク
大地	2%	4%	3%	2008年	スリーエネットワーク

エスアイケイアイ出版部（2015、2018、2020）を基に作成

の日本語教育の体制に問題があるとしている。小林（2005）は「教え方」だけでなく「教える内容」についても抜本的な見直しが必要だと述べている。庵（2011）は、40年前までは初級の日本語教科書しかなかったため、小林（2009）に指摘されているように、現在でも初級で学習項目が多すぎるとしている。

先行研究では初級文法項目に対して「初級では不要」という観点と、「実際の使用実態を反映していない」という観点、またはその両方の観点から、具体的な初級文法の提案が小林（2005）、庵（2011）、庵（2018）、松田・深川・山本（2011）らによってなされている。また、山内（2009）は日本語学習者の会話コーパスに基づいた観点から、庵（2009）は「ミニマム文法」という観点から、文法項目の難易度を考慮した新たな初級文法シラバスを提案している。

2.3 日本語教師と一般日本人の比較に関する先行研究

清（2004）は、日本語教師と社会人各100名の「～ないでください」を使った文例を比較し、社会人の文例では配慮・気遣いの文例が7割強を占めたが、日本語教師の文例では、日本語教科書にある文例と同様の注意、禁止表現が8割強を占め、日本語教科書に大きく影響を受けていることを指摘した。実際の使用場面で学習者がそのまま使用すれば対立関係を生じかねないこと、教師が無自覚であればその傾向は増幅されることを問題視している。

2.4 初級日本語教科書の適切ではないと思われる項目とその考察

日本語母語話者としての筆者の言語直観により、初級日本語教科書を分析し、適切ではないと思われる項目を抽出した。抽出した項目はいずれも、いわゆる日本語の文法の形態論という概念からいえば間違いではないが、筆者の言語直感では適切ではないと思われるものだった。それらの項目文が適切ではないと思われた原因として、以下の5つの観点を立て、抽出した項目をその5つの観点到に分類した。また、『みんな日』でのそれらの項目の出現課と出現回数を表

2にまとめた。

1 意味変化：言葉の意味が変化した

言葉の意味や使い方が変化したために、適当ではないと思われる例文が生じているもの。言葉の意味や用法の変化は、日本語学においても様々な研究がなされている事象であるが、初級日本語教科書の例文に取り上げられている言葉の中にも、意味や用法が変化したため、現在では違和感が生じているものがあると考えられる。

2 書き言葉：書き言葉を話し言葉として使っている

書き言葉が話し言葉として導入されているために、違和感が生じているもの。初級日本語教科書は、基本的に話し言葉を前提として作られており、今回調査した初級日本語教科書も、話し言葉を前提としている。会話表現に書き言葉が導入されているために、違和感が生じているものがあると考えられる。

3 文法重視：文法の形態と網羅を重要視している

文法の形態と文法を網羅することを重要視したため、適当ではないと思われる例文が生じているもの。初級日本語教科書では規範文法の形態と、文法を網羅することを重要視したため、使用実態とは違うものになったのではないかと考えられる。

4 無文脈：文脈や前提の提示がない

文脈や前提の提示がないために、適当ではないと思われる

表2 『みんな日』 項目出現課及び出現回数

観点	項目	考察	出現課*	出現回数
意味変化	まだまだです	謙遜しない人も多い	16課	4
	お国	「お国」は使わない	3課	12
	けっこうです	「けっこうです」は失礼	8課	5
	てあげます	恩着せがましい	24課	10
	やる・てやる	恩着せがましい 傲慢な表現	41課	25
書き言葉	てはいけません	話し言葉としては強すぎる	15課	12
	ないでください		17課	21
	なければなりません	話し言葉では「なきゃ」「なくちゃいけない」	17課	45
文法重視	私は・・・です	自己紹介で 「私は」は使わない	1課	4
	させる	大人に使役を使わない。 幼い子供はOK	48課	11
無文脈	Q：何で行きますか。 A：新幹線で行きます。	何で？の応答は理由を答える。	5課	9
	失礼ですが	名前を聞くのは失礼ではない	1課	3
代用	動詞+ますから	「普通体+ので」導入まで 「丁寧体+から」で代用	9課	43
	動詞+ませんから		9課	30
	動詞+ましたから		9課	18
	形容詞+ですから		9課	35
代用 (書き言葉)	ことができます	「可能動詞」導入まで代用	18課	30

* 複数ある場合は最初に提示された課

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

る例文が生じているもの。初級日本語教科書の大きな制約として、語彙、文法ともに既習の数が少ないということがある。そのため、通常会話では見られる文脈や前提を提示できず、“唐突に”文が提示されることにより、違和感が生じていると考えられる。

5 代用：学習者の言語習得過程を考慮している

学習者の言語習得過程を考慮したために、適当ではないと思われる例文が生じているもの。日本語教科書は言語習得の難易度を考慮して構成されているが、とりわけ初級の日本語教科書においては、既習の文法と語彙が非常に限られている。そのため、難易度の高いとされる言葉が導入されるまで、適切ではないが難易度の低い言葉が代わりに使われる。この事象により、違和感が生まれていると考えられる。

3. アンケート調査

3.1 アンケート調査概要

筆者が不適当だと感じた初級文法項目に基づいてアンケート調査を実施し、アンケート結果に日本語教師と一般日本語母語話者の差異があるか、日本語教師は日本語教科書の影響を受けているかどうかを考察した。アンケートは自由記述式5問、選択式11問（選択式質問のうち2問は調査協力者間で回答に差が出ないことを想定した「ダミー質問」）で、『みんな日』の例文を基にして作成した。日本語を母語とする高校生（15歳）から大人（70代）までの、一般日本語母語話者と日本語教育経験者、合計233名の調査協力者から回答を得た。調査は2022年8月1日から2022年8月25日の期間に行い、Googleフォームでアンケートを作成し、メーリングリスト、インスタグラム等を利用して協力を要請した。

集まった回答をアンケート調査協力者の年代、属性、日本語教授経験の有無、日本語教授の年数によって、学生（54名）、社会人（86名）、日本語教育経験10年未満の日本語教師（53名、以下「10年未満」と記す）、日本語教育経験10年以上の日本語教師（40名、以下「10年以上」と記す）、50代以上の日本語教育歴10年以上（37名、以下「50代以上10年以上」と記す）、50代以上の社会人（39名、以下「50代以上社会人」と記す）、20代～40代の社会人（47名、以下「20代～40代社会人」と記す）のカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーについてアンケート調査結果の集計と比較を行った。アンケート調査協力者の年齢、属性、非母語話者への日本語教授経験と年数、初級教科書の使用経験の概要は次のとおりである（表3）。

自由記述式問題5問の回答で集まった自由記述は、調査に関係のないフィラーなどを除き、調査対象としている特定のワードや表現が入っているか否かにより分類し、コーディングを行った。コーディングは、筆者が適切ではないと感じた教科書のワードや表現があるかどうかを軸に行った。なお、不適当な回答（英語での回答など）は無効とし

表3 アンケート調査協力者 数の概要

年齢								
18 歳未満	18～19 歳	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	合計
51 人	1 人	11 人	19 人	57 人	56 人	32 人	6 人	233 人
属性								
学生（15 歳～20 代）		社会人（うち、日本語教授経験あり）				日本語教育関係		
54 人		114 人（28 人）				65 人		
非母語話者への日本語教授経験の有無（学生を除く）								
なし		あり		10 年未満		10 年以上		
86 人		93 人		53 人		40 人		
日本語教授の際の使用教科書（日本語教授経験あり 93 人中）								
『みんな日』使用経験あり				『みんな日』使用経験なし			教科書名 回答なし	
61 人				25 人			7 人	

た。選択式問題11問の回答の選択肢は「自分が言う」「自分は言わないが、他の人が言うのを聞いたことがある」「自分は言わないし、聞いたこともない」とした。

アンケートの回答のパーセンテージは、「学生」、「社会人」、「10年未満」「10年以上」「50代以上10年以上」「50代以上社会人」「20代～40代社会人」の、それぞれのカテゴリーの回答数を、それぞれのカテゴリーの総数で割った数として、四捨五入して計算した。

3.2 アンケート調査結果

アンケート調査の結果、多くの項目で日本語教師と一般日本語母語話者の間に日本語教育経験の有無による差異が認められた（表4・表5）。

選択問題の回答結果を比較すると、その差異の現れ方として、日本語教科書の例文を一般日本語母語話者と比べて日本語教師が「自分が言う」と多く回答したものと、それとは反対に、「聞いたこともない」と多く回答したものとに分かれる傾向が見られた。筆者が定義した5つの観点のうち、選択問題を設定した「意味変化」「書き言葉」「文法重視」「代用」の4つの観点と、選択問題の回答結果を照らし合わせて、その傾向を分析してみる。

まず、「意味変化」の項目に分類した「お国はどちらですか」と「買ってやりました」では、一般日本語母語話者と比べて日本語教師が「自分が言う」と多く回答する傾向が見られ、特に「お国はどちらですか」でその差異が顕著に現れた。「意味変化」の項目のうち、「貸してあげました」には、回答結果の差異に一定のパターンが見られなかった。

一方で「書き言葉」に分類した「吸ってはいけません」「行かなければなりません」「作ることができます」（書き言葉・代用）では、一般日本語母語話者が「自分が言う」と多く回答したのに対して、日本語教師が「聞いたこともない」と多く回答する傾向が見られた。また、「文法重視」に分類した「コピーさせました」でも、日本語教師が「聞いたこともない」と多く回答する傾向が見られた。

「代用」の「丁寧形+から」では、日本語教師が「自分が言う」と若干多く回答する傾向が見られた。この項目では、日本語教育経験の有無を問わず、全てのカテゴリーで「聞いたこともない」が半数を占める結果となり、一般的には使われていないことが示唆される結果となった。

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

表4 アンケート調査結果の分析（選択問題）

使用（不適当な表現の使用の有無）

×：全てのカテゴリで「聞いたこともない」が半数またはそれ以上

○：全てのカテゴリで「自分が言う」が半数またはそれ以上

△：10年以上日本語教師が学生・社会人のどちらかよりも「自分が言う」が15%以上多い

▲：10年以上日本語教師が学生・社会人のどちらかよりも「聞いたこともない」が15%以上多い

経験差（50代以上10代以上と50代以上社会人の「自分が言う」比較）

×：差異5%未満 ○：差異15%以上 △：差異5%～15%

年代差（50代以上社会人と20代～40代社会人の「自分が言う」比較）

×：差異5%未満 ○：差異15%以上 △：差異5%～15%

観点	不適当な表現	質問（白は選択問題・水色は記述問題）	使用	経験差	年代差
意味変化	お国	お国はどちらですか	△	○	○
	てやる	私は娘におもちゃを買ってやりました	△	△	×
	てあげます	私は木村さんに本を貸してあげました	▲	○	○
書き言葉	てはいけません	ここでタバコを吸ってはいけません	▲	○	△
	なければなりません	これから病院へ行かなければなりません。	▲	○	○
書き言葉・代用	ことができます	天ぷらを作ることができます	▲	○	×
文法重視	させる	部長は高橋さんに資料をコピーさせました。	▲	○	△
代用	丁寧形から	今日は疲れましたから、何もしたくないです	×	△	×
		忙しいですから、テレビを見ません	×	△	△
ダミー	ダミー	チケットはどこで買えますか。	○	△	×
		バスが遅れたので、約束の時間に間に合いませんでした	○	○	△

表5 アンケート調査結果の分析（自由記述問題）

経験差（50代以上10代以上と50代以上社会人の比較）

×：差異5%未満 ○：差異15%以上 △：差異5%～15%

年代差（50代以上社会人と20代～40代社会人の比較）

×：差異5%未満 ○：差異15%以上 △：差異5%～15%

観点	不適当な表現	質問	比較項目	経験差	年代差
意味変化	まだまだです	「英語が上手ですね。」への返答	謙遜表現	○	○
	けっこうです	「塩を取りましょうか？」と言われて「要らない」と断る	けっこうです	△	○
	お国	初対面の外国人にどこから来たか丁寧に聞く	お国	○	○
書き言葉	てはいけません ないでください	禁煙場所でタバコを吸っている人に注意する	「行為」を注意	△	×
無文脈	何で？の返答に 手段で答える	「何で大阪へ行きますか。」への返答	「手段」を回答	△	△

以上のように、アンケート調査結果を筆者の分類した観点と照らし合わせると、大きな特徴として、「意味変化」の項目で日本語教師が「自分が言う」と回答する傾向が見られ、「書き言葉」の項目で日本語教師が「聞いたこともない」と回答する傾向が見られることがわかった。

また、日本語教師は一般日本語母語話者と比較して日本語初級文法項目に「自分が言う」を選ばない傾向があることがわかった。その傾向に反して、日本語教師の多くが「自分が言う」と回答し、一般日本語母語話者との差異が非常に大きく見られた項目は「お国はどちらですか」であ

った。「お国はどちらですか」を調査対象表現とした自由記述においても、特に「10年以上」で圧倒的に多く出現し、選択問題においても「自分が言う」とした割合が最も高かった。次に、日本語教科書の影響が顕著にみられた「お国はどちらですか」のアンケート結果詳細と考察を述べる。

3.2.1 「お国はどちらですか」自由記述式アンケート結果

「初対面の外国人にどこから来たか日本語で丁寧に聞く」場合、何と言うか自由記述式で回答してもらい、集まった回答をコーディングして集計した。今回の調査では、「お国はどちらですか」という表現が使われるかどうかを調べるのが目的であるため、まず「お国」を抽出ワードとして設定した。次に「お国」に相応する疑問詞、名詞を、回答数の多かったワードから抽出した。回答の多かったワードは、疑問詞（どちら・どこ）、疑問詞＋国（どちらの国・どこの国・どの国）、「出身」、であったため、それらのワードによって自由記述回答を以下の4つの項目に分類した。

- 1 「お国」を使った表現：「お国はどちらですか」など
- 2 疑問詞 を使った表現：「どちらからいらっしゃいましたか・どこからきましたか」など
- 3 疑問詞＋国 を使った表現：「どちらの国からいらっしゃいましたか・どこの国からきましたか」など
- 4 「出身」を使った表現：「ご出身はどちらですか」など

尚、「お国」に相応するワードとして「出身」を想定したため、「どこの国の出身ですか」という、「どこの国」と

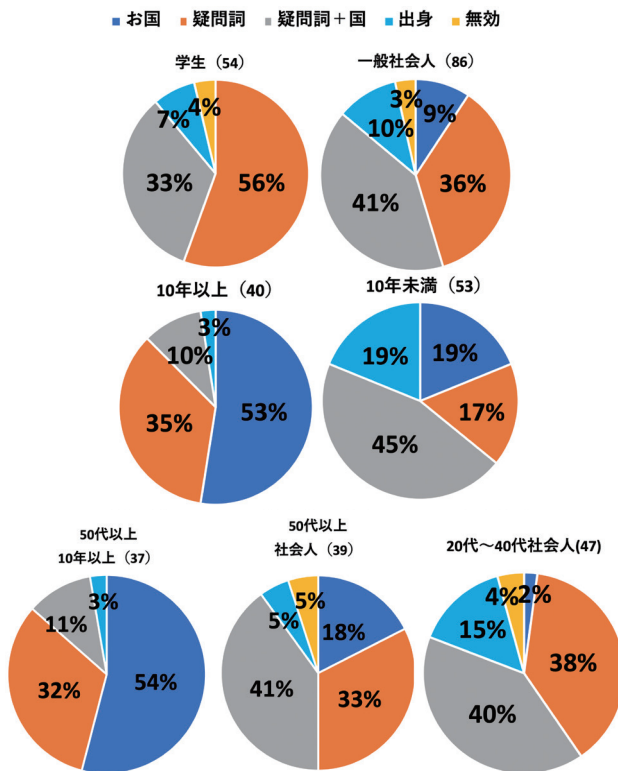
「出身」を両方使った表現は「出身」に分類した。最終的な分析対象とした有効回答数は228だった。アンケートの設問と結果は以下のとおりである（図1）。

次の場合、あなたなら日本語で何と言いますか？直感でお答えください。

Q：初対面の外国人にどこから来たか日本語で丁寧に聞く。（自由記述）

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

図1 「お国はどちらですか」自由記述 結果



「どちらから・どこから」「どちらの国・どこの国・どの国」といった、「疑問詞」及び「疑問詞+国」を用いた表現が、「学生」においては約9割、「社会人」で約8割、「10年未満」約6割と、3つのカテゴリーにおいて一番多く、いずれも半数を超えていた。

一方で「10年以上」では半数を超える53%が「お国はどちらですか」と記述していた。「学生」では「お国はどちらですか」という回答がゼロ、「社会人」では9%、「10年未満」では19%となっており、「10年以上」と他カテゴリーとの顕著な差が目立つ結果となった。

また、「50代以上10年以上」と「50代以上社会人」、「20～40代以上社会人」との結果の差異を見てみると、「お国はどちらですか」との回答が「50代以上10年以上」では54%であったのに対し、「50代以上社会人」が18%、「20～40代社会人」が2%であった。社会人の年代間の差異も見られたが、50代以上の同年代で、日本語教育経験の有無による差異が、大きく現れる結果となった。今回の調査から、特に「10年以上」の教師において、日本語教科書の影響が大きいことが示唆される結果となった。

3.2.2 「お国はどちらですか」選択式アンケート結果

「お国はどちらですか」の言い方を「自分が言う」「自分は言わないが、他の人が言うのを聞いたことがある」「自分は言わないし、聞いたこともない」の3択で回答してもらった。なお、『みん日』の例文では「お国はどちらですか」「アメリカです」となっているが、アンケートの調査協力者を日本語母語話者としたことから、場所を「日

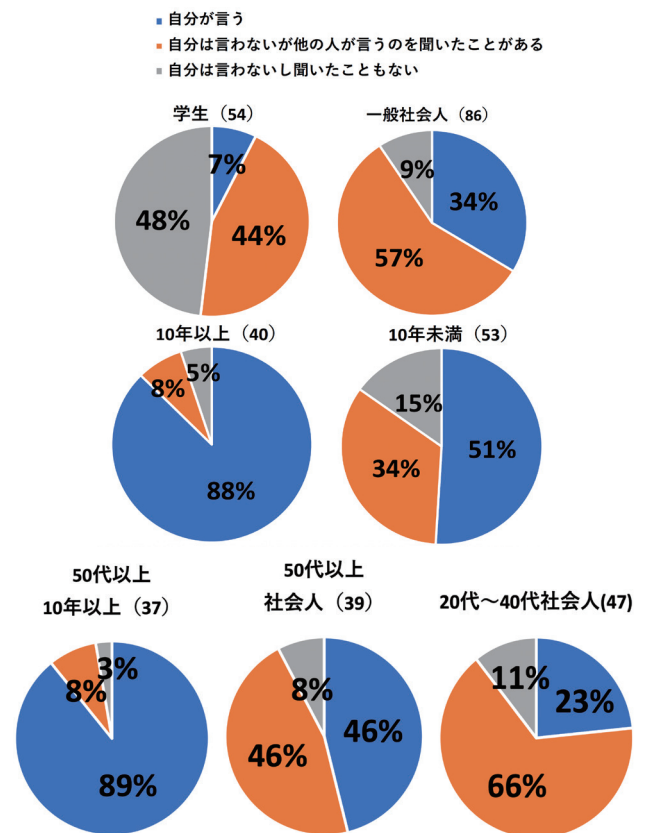
本」に変更した。最終的な分析対象とした有効回答数は233だった。アンケートの設問と結果は以下のとおりである(図2)。

次の下線部の言い方についてお尋ねします。直感でお答えください。

Q:「お国はどちらですか。」「日本です。」(選択式)

- ☐ 自分が言う
- ☐ 自分は言わないが他の人が言うのを聞いたことがある
- ☐ 自分は言わないし、聞いたこともない

図2 「お国はどちらですか」選択 結果



「お国はどちらですか」を、「自分が言う」と選択した割合は、「学生」で7%、「社会人」で34%、「10年未満」51%であったのに対し、「10年以上」では88%と、他カテゴリーと日本語教師、特に「10年以上」との間に顕著な差が見られた。また、「50代以上10年以上」では89%であったのに対し、「50代以上社会人」が46%と、同年代で日本語教育経験による差異も見られた。「20代～40代社会人」では23%と、年代による差異も見受けられた。

「自分は言わないし聞いたこともない」とした割合は、「学生」では48%と5割近く、「10年未満」15%、「社会人」で9%、「10年以上」では5%であり、「学生」と他カテゴリーの間に大きな差が見られた。「聞いたこともない」とした割合は「50代以上10年以上」では3%、「50代以上社会人」が8%、「20代～40代社会人」11%であり、同年代の日本語教育経験の差は若干見られたものの、社会人の年

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

代差は見られなかった。

前述した通り、「初対面の外国人にどこから来たか日本語で丁寧聞く」自由記述式問題において、「学生」から「お国はどちらですか」との回答はゼロ、「社会人」では9%であり、「どちらから・どこから」「どちらの国・どこの国・どの国」といった、「疑問詞」及び「疑問詞+国」を使った表現が、「学生」においては約9割、「社会人」で約8割であった。従って、記述、選択式のそれぞれの回答から「お国はどちらですか」という表現は「学生」「社会人」にはほぼ使われていないということが言える。

一方で「10年以上」では記述式で53%が「お国はどちらですか」と回答し、選択式でも88%が「自分が言う」と選択した。この項目が殆どの初級日本語教科書で扱われていることを考えると、特に日本語教育経験「10年以上」の教師において、日本語教科書の影響が顕著にみられるということが示唆される。

3.2.3 「お国はどちらですか」表現分析

アンケートの結果、日本語教科書の影響が顕著にみられた「お国はどちらですか」という表現は、相手の出身を尋ねる表現として日本語教育では馴染みのある言葉だが、一般的には使われていないのではないかとということが示唆された。「お国はどちらですか」という表現は「お国ことば」などに見られるように、その昔、日本が各地方を「国」と言っていた頃の名残の表現である可能性を考え、筆者は分類を「意味変化」とした。しかし「お国はどちらですか」という表現は、日本語教育において新たに“創造”された表現なのではないか、との考察もできる。それは、外国人が増加する前は「相手の出身国を尋ねる」という状況は一般的ではなかったため、「相手の出身国を尋ねる」という機能が必要になった日本語教育界において、新たに“創造”された表現なのではないかという可能性である。

「お国はどちらですか」の表現は1998年出版の『みんな日』と、それ以降に出版された教科書には見られるが、『みんな日』の元になった『新日本語の基礎』（1990年）には見られない。このことから、この表現は『みんな日』から広がっていったのではないかと、という可能性が考えられる。

アンケート調査の自由記述で、「初対面の外国人にどこから来たか日本語で丁寧聞く」表現として、一般日本語母語話者の8,9割から回答があった表現は「どちらからいらっしゃいましたか」「どこからきましたか」「どこの国からきましたか」「どちらの国からいらっしゃいましたか」であった。これらの表現よりも、「お国はどちらですか」は日本語教授の際に都合がいいので提示されたのではないかと考えられる。例えば「どこからきましたか」「どちらからいらっしゃいましたか」では、「国」ではなく、今住んでいる「場所」を聞いていると誤解される可能性がある。また、「どこの国からきましたか」では丁寧さが足りず、「どちらの国からいらっしゃいましたか」では、「いら

っしゃる」という尊敬語を導入する必要がある。既習の語彙で、誤解を生まずに丁寧さを維持できる表現が「お国はどちらですか」だったのではないだろうか。

3.2.4 「お国はどちらですか」の日本語教師への影響

日本語教師は日本語初級文法項目に「自分が言う」を選ばないという傾向に反して、「お国はどちらですか」に関しては日本語教師の多くが「自分が言う」と回答した。この項目においては、日本語教師は教科書の例文に影響を受けていると言えるであろう。そこで、日本語教師が「お国はどちらですか」を「自分が言う」とした原因を考察する。

まず、教科書の出現回数の影響を考え、アンケートに出題した文法項目を『みんな日』の出現回数で比較したところ、出現回数の多い順から「丁寧体+から」126回、「なければなりません」45回、「ことができます」30回、「てやる」25回に次いで、「お国はどちらですか」の12回となった。これらの項目と比較すると、出現回数12回の「お国はどちらですか」で「自分が言う」と回答した日本語教師の多さと、一般日本語母語話者の少なさとの差異は突出しており、出現回数の影響があるとは考えられない。

次に、日本語教師の経験の影響を考える。日本語教師が「外国人に出身国を日本語で聞く」という経験が、日本語教師になるまでなかったため、日本語教師の中に既存の代替表現がなかったのではないかと、ということが考えられる。そのため、養成講座で教わったり、教師となって使用することになった教科書の場面設定と表現を、そのまま受け入れたという可能性である。また、「お国はどちらですか」は教科書の最初の「自己紹介」の場面で出てくる表現であるため、養成講座でも初期に学ぶ項目となりやすく、日本語学校でも日本語教授初心者が最初に受け持つ項目になることが多いので、影響を受けやすいという可能性も考えられる。

以上のことから「お国はどちらですか」は「初対面の外国人にどこから来たか丁寧聞く」表現として日本語教師は「自分が言う」と多く回答したのではないかと考えられる。

4. まとめ

本研究のアンケート調査の結果、多くの項目で日本語教師と一般日本語母語話者の間に日本語教育経験の有無による差異が認められた。選択問題の回答結果を比較すると、その差異の現れ方として、日本語教科書の例文を一般日本語母語話者と比べて日本語教師が「自分が言う」と多く回答したものと、それとは反対に「聞いたこともない」と多く回答したものとに分かれる傾向が見られた。

また、日本語教師は一般日本語母語話者と比較して「自分が言う」を選ばない傾向があることがわかった。ところが「お国はどちらですか」については、その傾向に反して日本語教師の多くが「自分が言う」と回答し、一般日本語

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

母語話者との差異が非常に大きく見られた。「お国はどちらですか」は、教えやすく使いやすい表現であるので、今後この表現が一般に広まっていく可能性もあるかも知れない。しかし今回のアンケート結果では、一般の浸透率は低く、日本語教師以外から「お国はどちらですか」と聞かれる可能性はほぼないと思われるので、代替表現を検討する必要もあるのではないだろうか。

筆者が「書き言葉」に分類した項目は、先行研究では話し言葉としては使用が適当ではないとされているが、一般日本語母語話者の多くが「自分が言う」とした。こうした矛盾した結果が出た原因のひとつとして、会話表現を想定して文字表記のアンケートに回答してもらったため、という可能性が考えられる。会話表現を想定したアンケートであったが、実際には文字表記のアンケートに回答してもらったため、実際には話していないが、文字表記を見たことがある経験から「自分が言う」を選択したという可能性である。

一方で、同じ条件のアンケートの同じ項目に対して、多数の日本語教師が「聞いたこともない」と回答した。このことは日本語教師が、日常会話として教えている文法を学習者に対しては使用するが、実際は「母語話者としては話さない」という違和感を日頃持っているためなのではないか、という可能性が示唆される結果となった。文字表記のアンケートの矛盾点が、図らずも一般日本語母語話者と日本語教師の認識の差異を炙り出す結果となった。

今回のアンケート結果では、一般日本語母語話者と日本語教師の間で、多くの日本語初級文法項目に対する反応に差異が見られたことから、日本語教師は教科書の例文に影響を受けていること、そしてその反応は項目によって異なり、教科書の影響がそのまま出ているものと、「聞いたこともない」と強く反応するものとに分かれることがわかった。

また、今回のアンケート結果では、日本語教師は教科書の文法を母語話者としては使っていない可能性が示唆された。アンケートの最後に任意で貰った日本語教師からのコメントにも「日本語学習者と会話するとき、日本人と話すときには会話文型を変える」「初級文法の言い回しは日常生活ではあまり使わず、学生も中級以上になると使い方が変わっていくと感じています」などがあった。

このように日本語教師は自分は実生活では使わない言葉であっても、学習者が教科書通りに話していたらそれは許容しているのではないだろうか。さらに、学習者の日本語の習得度を考慮して、学習者に理解のできる範囲での日本語を使用することを常とするあまり、より適切な日本語を導入するまでの「代用」と考えられる日本語を、学習者の前では修正しないまま使い続けているということもあるのではないだろうか。

例えば本論文で筆者は、教科書にある「忙しいですか」と「疲れましたから」の「丁寧体+から」を、「忙しいので」という「普通体+ので」の導入までの「代用」と

位置け、「丁寧体+から」を「自分が言う」かどうかをアンケートの調査項目に入れた。アンケートの結果、「丁寧体+から」を使ったどちらの例文も、「自分は言わないし聞いたこともない」と答えた割合が、全てのカテゴリで半数以上を占める結果となった。佐々木(2019)は、日本語学習者は「から」を多用するが、日本語母語話者は「ので」を使っていることを考察している。

「丁寧体+から」は、先行研究や今回のアンケートの結果から、一般には使われていない可能性が高いが、日本語教育では「代用」として「ので」より前に導入されて定着しているため、学習者も教師も中級、上級でも修正することなく使い続ける傾向があるのではないだろうか。

このような項目については、導入に際して教師の十分な理解と配慮が必要であろう。初級での導入が致し方ない場合には、中級、上級で意図的に矯正するなどの工夫も考えられる。

最後に本研究の研究上の課題を述べる。今回のアンケートでは、調査協力者のうち、日本語教師は殆ど『みんな日』の使用経験があり、『みんな日』の使用経験がない日本語教師のデータが十分に集まらなかった。そのため日本語教師間で『みんな日』の影響を比較することはできなかったが、今後さらに広くデータが集められたら、『みんな日』の影響を比較することも可能だと思われる。

また、今回の調査では、筆者が不適当だと感じた項目の根拠の多くを先行研究に求めたが、ここ数年で国立国語研究所などによる、数々の話し言葉コーパスもますます充実していることから、以前よりも簡単に、体系的かつ詳細に話し言葉の実態を調査することができるようになった。こうしたコーパスを十分に活用すれば、さらに実際の使用実態に沿った文法項目を提示することも可能になるであろう。

初めに述べたように、「職業病」とは、「ふだんから出てしまう職業上のくせや習慣」のことであるが、本研究のアンケート結果から、日本語教師もその例外ではないということが示唆された。言うまでもなく日本語教師とは、実社会で日本語を必要としている人に、日本語を教える仕事である。その役割を考えると、日本語教師自身が実社会で使われている日本語をアップデートする作業は必要不可欠であると言える。その際、自分の言語感覚に、教科書や日頃の仕事の影響があるかもしれないという俯瞰した視点と自覚を持つことも、必要なのではないだろうか。

謝辞

2年に渡り、最後まで真摯にご指導くださった大橋理枝教授に心から感謝いたします。社会に貢献できる研究を、という先生の一貫した姿勢に、自分なりに誠実に論ずることの大切さを教えて頂きました。

研究の先が見えずに苦しい時もありましたが、大橋ゼミの皆さん、合同ゼミの皆さんから、常に温かい励ましの言葉を頂き、支えて頂きました。コロナ禍の中zoomでの開

日本語教師は初級日本語教科書に影響されているか
— アンケート調査による一般日本語母語話者との比較 —

催でしたが、皆さんと一緒に研究を進めることができ本当に良かったです。

アンケートに協力して下さった皆さま、貴重なお時間をアンケートに協力して下さり有り難うございました。皆さまのご協力で論文を完成させることができました。有り難うございました。

文献

- 庵功雄 (2009) 「地域日本語教育と日本語教育文法 - 「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3, 126-141
- 庵功雄 (2011) 「日本語教育文法からみた「やさしい日本語」の構想: 初級シラバスの再検討」『語学教育研究論叢』28, 255-271
- 庵功雄 (2015) 「まえがき」庵功雄・山内博之 (編)『データに基づく文法シラバス』pp.iii-vi くろしお出版
- 庵功雄 (2018) 「新しい留学生向け総合教科書作成のための予備的考察」『言語文化』54, 3-19
- エスアイケイアイ出版部 (2015)『日本語学校全調査 2015』エスアイケイアイ
- エスアイケイアイ出版部 (2018)『日本語学校全調査 2018』エスアイケイアイ
- エスアイケイアイ出版部 (2020)『日本語学校全調査 2020』エスアイケイアイ
- 小林ミナ (2005) 「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』第1部 (pp.23-41) くろしお出版
- 小林ミナ (2009) 「文法研究と文法教育」小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』第2部 (pp.18-37) 凡人社
- 佐々木藍子 (2020) 「日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程: 学習環境の違いと接続助詞「～ので」との比較から」国立国語研究所論集 NINJAL Research Papers 19, 89-108
- 清ルミ (2004) 「コミュニケーション能力育成の視座から見た日本語教科書例文と教師の“刷り込み”考 ‘ないでください’ を例として」『異文化コミュニケーション研究』16, 1-23
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.1-20 くろしお出版
- 山内博之 (2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 松田真希子・深川美帆・山本洋 (2011) 「「使わなかった」は「使っていない」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』論文編 (pp.295-311) ひつじ書房

本論文で言及した教科書

- 『新日本語の基礎I』(1990) 海外技術者研修協会編 スリーエーネットワーク
- 『大地』初級1 メインテキスト (2008) スリーエーネットワーク
- 『大地』初級2 メインテキスト (2009) スリーエーネットワーク
- 『できる日本語』初級本冊 (2011) 嶋田和子監修 できる日本語教材開発プロジェクト著 アルク
- 『できる日本語』初中級本冊 (2012) 嶋田和子監修 できる日本語教材開発プロジェクト著 アルク

調査対象教科書

- 『みんなの日本語』初級I第二版 (2012) スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語』初級II第二版 (2013) スリーエーネットワーク